

375

神国日本から神洲東亞へ

安中昌信著

特 241

419

明治會本部發行

号2第  
トッレフンパ

3

3

2



\* 0001646000 \*

0001646-000

特 241-419

神国日本から神洲東亞へ

安中昌信・著

明治會本部

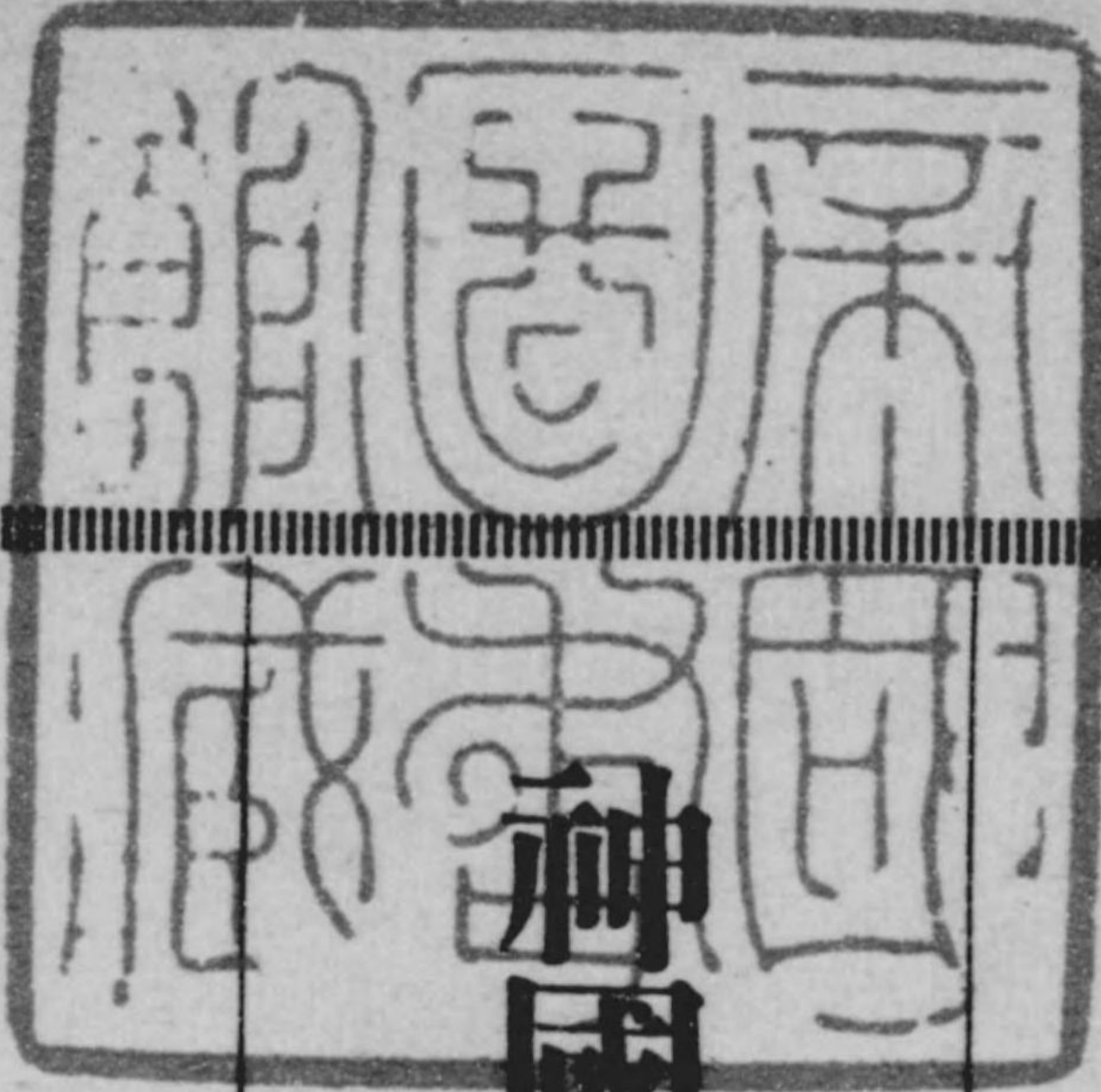
昭和 14

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



特241  
419



安中昌信著

神國日本から神洲東亞へ

明治會發行





神武天皇御尊容



明治會編輯「日本國體新講座」口繪より轉寫

(故皇室技藝委員 竹内久一謹刻)

「人類同善世界一家」の大表現 慈眼大視千界威容臨兩半球



明治天皇御製

國のためあななす仇はくたくとも  
いつくしむべき事な忘れそ

天軍大慈



皇軍仁慈の治療をうける支那の子供達

破邪顯正



興亞の黎明に立つ

中支〇〇守備の皇軍勇士

目次

一	支那事變はどうかなる？……………	(一)
二	支那事變をどう観る……………	(四)
三	手前味噌の侵略不侵略……………	(七)
四	皇道の解釋に廣狹あり……………	(一一)
五	須らく民心を攝取せよ……………	(一四)
六	色香美味の豫防注射……………	(一八)
七	神州東亞と我等の使命……………	(二四)
八	支那民族に神性ありや……………	(二七)
九	建國の八大主義に省みる……………	(二九)
十	支那の大意に報酬すべき秋……………	(三二)



## 汎く戦線の後各の位に告ぐ

支那事變も、はや二ヶ年を満じて、時局はますます重大であります。その名は支那事變であり、本質的には東亞の大事變で、人類世界を本来の姿に還すべく、先づ亞細亞を亞細亞本来の姿に還さんとする大靈動が、東亞の一角から勃發したものに外ならないのであります。人類はその相から申しましても元來平和を愛好するやうに出来てをります。然るに上下幾千歳何時も争ひの絶えぬといふことは、要するに此の世の中が強力な一つの道義的勢力によつて統一せられてゐないからであります。今や我が日本國は、神武建國の洪謨に基き、明治中興の聖訓を服膺して、人類待望の其の聖戰に従事いたして居るものと申さねばなりません。この時、この際、銃後を守る者も、戦線に一身を捧げる忠勇義烈の將兵諸氏に負けず劣らず、まず國體意識を充實するの急務を痛感するのであります。

我が明治會は、聖戰の勇士、護國の英靈に滿腔の感謝を捧げつゝ、さらに引續き今秋の明治節を期して、一層充實せる一大國體運動を興すべく、目下いろ／＼準備中であります。(明治會)

## 神國日本から神洲東亞へ

安 中 昌 信

### 一、支那事變はどうなる？

支那事變の將來はいつたいどうなるだらう？ かういふ疑問に、もしも完全な答が得られたとしたら、われ／＼日本國民の心の奥底には、一層の明るさを増して來ることであらうと思ふ。然し、この問題に直ちに明快な答をなし得る人は、さうさらにあるべしとも思はれない。それは世に識者がないといふことでもなければ、また今日の日本に先覺者が缺乏してゐるといふことでもない。それは何故か、それらとは全く別な問題であるからである。而してまた、その答をなし得る人は全くないかといふに、實は今日の日本に有り餘るほどあるのである。たゞ、單にその人々が、自分自身に、それが出來ると氣附かずにあるだけのことである。これは誠に残念千萬なことでもあり、時局柄、不經濟とい



へば、この上もない不経済なことでもある。

といへば、なんだ、人を馬鹿にするな、夢のやうな話ではないか、この忙しい時に、冗談はよせ、と氣の早い人々からは、即座にぼんと撥ねつけられさうな氣もするが、決して嘘でもなければ冗談でもない。些か時局の將來の爲めに、この立言をなして、普ねく世の一考を煩はさんと欲するものに外ならないのである。

さて、支那事變の將來は如何なるか、この問題を解くには、その前提として、事變が過去にどうあり、現在にどうあるかを考へてかゝるのが順序である。しかし、事變は云ふまでもなく進行中である。そして國家は、その爲めに全力を擧げてゐる。總動員法は物資はもとより、言論の上にも適用せられねばならない。換言すれば、如何にそれが事の真相を極めるために必要であらうとも、敵に便宜を與へるやうなことは、極力つゝしまねばならない。だから、事變の過去、現在、乃至その將來を論ずるにしても、そこには自ら限度がある。かくて、一華を見て春を推し、一葉落ちて天下の秋を知るといふ用意も必要となつてくる。

思へば、昭和十二年七月七日、北支蘆溝橋畔に轟いた一發の銃聲が、現在かくの如き大事にならうとは、果して誰かその當時に於て想像し得たであらうか。日増しに募る排日、侮日、抗日の暴狀、一觸即發の危機は誰しも感じてゐた。又、識者は早く打開の道を講じなければ必ず大事に至ると深く憂

慮してゐた。されば、事變の勃發は、熟れ切つた腫物が、自然に破れて膿を出したものと見て、私かに事變の將來を樂觀し、これで日本の支那における權益も、やうやく確乎たりえやうと、思はずほくそ笑んだ人も少くなかつたことであらうと思ふ。否、さう樂觀した人が斷然多かつたればこそ、その大勢を制して今日の事態を招來したといふも過言ではあるまい。もしも其の當時、今日ほどの大事となるものと、少しでも思ひ至つてゐたとしたら、誰しもその擴大防止にもつと眞劍となつてゐたか、若しくは其の事變の處理に、もつと萬全の策が施されてゐたであらう。

それはともかく、北支事變は上海、中支に飛火して支那事變と擴大し、さらに今や南の方、廣東、海南島の涯まで及び、實に我が領土に倍するといふ廣大な地域を制して、その好むと好まざるとに拘らず、英佛ソ米等を背景とする蔣一黨の長期抗日を克服しつゝ、いはゆる東亞新秩序の長期建設の爲めに臥薪嘗膽、今し荆棘の道を邁往するより外なき現況である。

即ち支那事變の過去は擴大であり、その現在は繼續であり、新建設であるとするならば、その將來は端的にいつて、その完了、成就であらねばならない。今、支那事變はどうなるか、といふ問題を追究し來つて、支那事變の將來は、かくあらねばならないといふ決論に到達した。この決論は果して其の答辭たり得るであらうか。

支那事變の遂行に當つてゐるものは、もとより日本である。日本がその國力を擧げて、支那の抗日



一黨、乃至その後援諸國を向ふに廻しても、敢て行り遂げやうとしてゐるところのものである。相手のある仕事であるから、自分の勝手にばかり行かないこと勿論であるが、蔣一黨の出様、英佛ソ米の思惑、劃策は如何にあらうとも、日本としては、いはゆる乗りかゝつた船である。利害得失を超越して、中流に漕ぎ出してしまつたのであるから、今は目的の彼岸に到着するまでは、腕の一本や二本、折れやうが挫けやうが、入り更り立ち替り、断じてその漕ぐ手、踏んばる足をゆるめることは出来ないのである。もし一刻でも止めたなら、その時は一瀉千里、涯も知られぬ下流へ押し流されてしまふか、乃至は一瞬に濁流の底深く覆没し去らねばならないのである。そこで第二の答は、大道の占ひではないが、奮發すれば大吉であり、油断すれば大凶である。

さらに、この考へを推し擴めて行けば、支那事變の將來はどうなるか、といふこの重大な問題に、眞實力強く答へ得るものは、限られた世の識者でもなく、また先覺者でもなく、實はわれ／＼日本國民の全體であり、その覺悟如何、その心掛如何によつて、吉凶いづれの答をも得られるといふことになるのである。即ち、「事變の將來はどうなるか」といふ質疑は、須らく「事變の將來をどうするか」といふ我等の覺悟、計畫の如何を問ふ反問的答辭を甘受すべきものと思ふ。

## 二、支那事變をどう観る

實に日本の立つてゐる現段階は、事變がどうなるなど、左顧右眄してゐられるやうな、そんな呑氣な時ではなく、事變の仕末をどうつけるかといふ覺悟、目安をさらに強固明確にして、一路それに邁進しなければならぬ非常時なのである。しかるに茲に「支那事變をどう観る」などは随分それこそ呑氣な話のやうであるが、諺にも「急がば廻れ」といふ、事變に對する我等の覺悟、計畫をさらに正しく、堅く樹て直すためには、どうしても今一度、深く支那事變そのもの、實體を探究して見る必要がある。

支那事變は、滿洲事變の續きであるといはれる。その滿洲事變は如何して起つたかといへば、事は支那國民黨一味の排日、侮日、抗日から起つたものであるとされる。たしかにそれに相違ないのである、然し、それは單に外觀、外縁から觀察したものであつて、眞にその實體を盡したものであるとはいへない。そこで、一步ふかく觀察するものは、支那の排日、侮日、抗日の大勢は、如何にして馴致されたかと追尋して、それは支那の誤れる排日教育によつて醸成されたものであるといひ、さらに支那國民黨は、その排日を方便として、支那の近代國家、民族國家の結成、國內の統一を計らんとしたものであるといふ。それも、それに相違ないであらう。また克く省察するものは、滿洲事變、及び今回の支那事變の勃發は、直接、支那の排日教育と排日行爲とに緣因するとしても、支那としてその排日教育を普及せしめるに至つたに就いては、日本としても、そこに多少の責任の及ぶべきものがないではない。



即ち内外ともに支那人を遇するの道に於いて、決して開然するところがなかつたとはいへぬ。その實例はかくくと數へ立てて見れば、それも成程と合點せねばならぬ事も亦決して少しとしないであらう。

かくて若し、事變の責任は主として支那側にあるが、多少日本側にもある、とすれば、これを解決する責任、また双方にあること勿論である。そして、さらに一步を進めていふならば、今その責任がどつちにあるか、など、論戰に危急貴重の日を空消することは、例へば自動車と満員電車が衝突して、双方に大した怪我人を出してゐるといふのに、その救急を餘所にして、いはゞ責任のなすり合ひをしてゐるといふやうな馬鹿げた話ともいへねばなるまい。今は、たゞ何よりも早く、怪我人といふ、事變の處理に専心しなければならぬ其の時である。

而して事變の實際は、支那側には汪兆銘の數次の聲明を始め、相當に和平の機運が動いて來てゐるやうであるが、大勢はなほ長期抗戰のスローガンを遽に棄つべしとも思はれない。そして英佛ソ米列國の後援を頼みに、徐ろに日本の經濟的衰勢を待つといふ態度に出でゐる。一方、日本の態度は、廟議一決以來、一貫不動の方策に終始してゐるとしてもそれに協力すべき國民の態度には、内地に於いても現地に於いても、相當に遺憾なものがあつてゐる。即ち現地にあつては一攫千金、濡手で粟といふ、いはゆる一旗組が横行して、徒らに重ねて排日の種を播き散らしつゝあ

りといはれ、また内地にあつては、これも同じくこの非常時局の波に悪乗りして、ひと儲けもふた儲けもしなければ損だといふ暴利組、またそれと趣は全く異なるが、純綿ものや純毛もの、無くならぬ中、着物や洋服に材木の入らぬ中に、といふ自分本位乃至家族思ひの、善良だが、短見な人達によつて、不當に物價が吊上げられて、戰鬪資材の整備にも支障を來すといふ恐るべき結果をも招來してゐる。一旗暴利組をベストがコレラ菌の撒布とするならば、これは結核菌か化膿菌の吸入にも譬ふべきもので、前者よりも後者の方が、誰しもそれと氣づかずに感染し勝であるところに、むしろ一層の危険が伏在する。

なほ、これらの過誤、乃至罪惡の起り來る根源は、早くいへば國民の各自が支那事變に對する觀方、即ち事變認識の淺薄、量見の狭小なるところに存在する。然らば、支那事變は如何に理解され、如何に認識せられてゐるであらうか。

### 三、手前味噌の侵略不侵略

第一に、これは直接、國民の觀方といふわけでないが、支那事變を目して、日本の侵略であるといふ觀方、支那の蔣一黨は勿論のこと、その背景をなす英佛ソ米等の主張するところである。これらの國々は、いはゆる持てる國々であるが爲めに、現状の打破を欲せず、既得權益を何處までも維持せん



とする立前から、日本は持たざる國であるから、定めし現狀を打破して持てる國たらんと志してゐるであらう、即ち支那事變も、その一つの現れであると、卑しき者は卑しく解すの類で、武力行使即侵略行爲と速断妄解しつゝある。

ところで、此處で注意せられねばならないことは、この主張に類似する考へが、日本國民その自體の中にも、少からずはびこつてゐる、といふことである。我が軍が何處そこを占領したといへば、それだけ日本の領地が擴大せられたかの觀を抱いて、素朴な歡びに浸つてしまふのである。そして、また、どこそこ、どういふ資源があるとしても聞けば、うん、そこも早く占領して取つてしまへばいい、などゝ頗る簡單に考へて、さうすれば自分もすぐ持てる者に早變りするか如き錯覺に發足した愛國的法悦に溺没して、胸をわく／＼させながら、最も熱心に戰況の推移を注視するといふ。かういふ考へ方をする時、なんと昨今の戰況は憂鬱なものとなつてしまふことであらう。

その上、この考へ方は、また我等の心の中の何處かに、例外なく巢くつてゐる侵略性の一つの現れで、油断をすれば、天の一方に懸れた一片の黒雲が忽ちに一天を覆ひ盡すが如く、我等の全心を眞黒に塗り潰してしまふしるものでさへある。若しも、この侵略性を、我等の心から清算するか、乃至は之を淨化することが出来ないとしたならば、實は白日の下、我々と雖も、堂々と彼等持てる國々の侵略呼ばはりを反駁し得ない道理である。

その二は、持たざる國日本が、持てる國支那に進出することは、何もさう他國の思惑を氣にしなから、おづ／＼と行すべき筋合のものではない。斬取り強盜、武士のならひではないが、堂々と斷行して可い筈のものであるといふ觀方である。そして、それは例の生存權の行使といふ考へ方で裏書される。地球上、この世に生きとし生けるものは、皆その生存を主張する權利がある。日本の國土は狭く、資源も乏しく、しかも馬鹿に人口が多い。日本は今や大陸に伸びなければ、自爆自滅するの外はないであらう。然るに支那は地大物博、まだ／＼日本人の百萬や二百萬乃至千萬や二千萬入りこんだにしても、充分にこれを收容し切れる筈である。それに日本は何も、一概に支那を武力で奪つて、自分の領土にしてしまはなければならぬなどゝ毛頭考へてはゐないのである。たゞ經濟的に發展するの道さへつけて貰へばいいのである。然るに支那は無法にも、それを拒否するは未だしも、日本が日清日露の兩役で、血をもつて購つた既得權益をすら、それを素直に認めやうとはせずして次第々々に回收剝奪せんとさへしたのだ。まことに天人俱に怒るの暴舉である、一撃して反省せしめずんばあるべからずといふ、いはゆる暴支膺懲の聲とも呼應して、日本の行動、武力行使の正義性を、生存權と自衛權の兩方面から強く主張せんとするものである。

然し、この考へ方も、この頃では一時ほどの勢力はなく、今は専ら防共樞軸を主體とする、第三の考へ方に轉位してしまつたやうである。防共樞軸にはムソリニがあり、ヒトラーがある。流石に日本



人のある人々のやうな下手な理窟は捏ねない。飽迄も堂々と、それ／＼自國の立場を強調、闡明してほゞ遺憾なきものがある。平沼首相はこれに追隨するを欲せず、日本には日本固有の皇道が存在する、イタリーのファシズムの眞似をすることもなければ、ドイツのナチズムに便乗するの必要もないと、折角、聲を振り絞つて、祭政一致の要諦を説かれてゐるが、この方はあまり人氣がなく、中には嘲笑の種にせんとする不心得者すらある。それは怪しからぬことで、日本は固有の皇道の方面から防共樞軸に参加したので、共産黨は世界人類共同の敵であり、各國、各民族固有の文化を破壊し、同胞を互ひに相争はしめ、相殺戮せしめんとするものである。然るに支那は、この世界赤化の魔手に躍つて、内は自國傳統の文化を破壊し、外は我が日本の正當なる立場をすら否定して、果ては日本の存在を東亞から全然抹殺せんとしてゐる。この恐るべき共産黨の魔手を排除して、憐れむべき支那四億の民を救ふと共に、日本の大陸に於ける正當なる權益を伸展せしめることは、延いては世界人類の福祉に貢献する所以であり、崇高なる日本の義務でもあると、かく主張する。

こゝに至つて、卑俗なる物質的權益思想を脱して、そこに精神的義務思想の開展を見るのであるが、しかもなほ、今次事變が聖戦と呼ばれるには、未だ充分ならざるものがあるのである。そこで、いはゆる八紘一字、六合一都の主張、皇道宣布の叫びとはなつた。

#### 四、皇道の解釋に廣狹あり

滿洲事變の勃發、それにつゞ滿洲國の建國は、即ち王道樂土の建設を目標とすると、その事變處理の目標が、識者、先覺者によつて高揚せられた時、一連の皇道專賣主義者たちからは、王道は支那のものであつて、日本のものではない、日本固有の道は即ち皇道と呼ぶべきである、日本國體の精神によつて、新たに滿洲を開發するのであるならば、須らく王道の二字を廢して、皇道の二字を使用すべきである云々と、批難の矢を放つたのであつた。然るに、學者の眞摯な研究、該博なる考證によると、皇道といふ語も決して日本の專賣ではなく、既に古く支那にその用例があるといふ。されば、別しては皇道と呼ぶと同時に、總じては王道と呼ぶに何の不可あらう、その精神、原理に於いては全く甲乙のあるべからざるものである。然るに皇道の二字に執して、王道の用例を貶すが如きは、例へば舶來物、隣家の牡丹餅を、良し甘しと感ずる程度の、その逆を行つたもの、自分のところの物は庭の柿の木まで實生獨特であるとわざ／＼豆柿の甘さを自負する類に過ぎない。第一、我が國發祥の神勅、天壤無窮の詔には、そも何とあるか、まさしく「これ我が子孫の王たる可き地なり」とあるではないか。否、あれは『王』ではない、『王』と大和訓みすべきものであるなどと、かぶりを振つて見たところで、自分では洋服を着ながら、西洋の事といへば、何でも貶さなければ氣がすまない



のと一般、量見の狭さ加減、手前味噌の臭さ加減は、まづもつて鼻持ならぬ獨善孤立主義ではある。皇道國粹主義、まことに結構であるが、第一いやしくも道と名のつくものを、自分だけで獨占して悦に入らうなどは、そも／＼その考への根本が間違つてゐる。それは即ち天下の公道を強いて狭くして、わざ／＼私道と墮落せしめて、彼奴等は俺の家の道を毎日通らねばならないのだ、と誣言し、且つは、朝夕頭の一つづも下げさして他愛もなく喜んでゐる因業地主も同様の考に過ぎない。道を天下に施さんとするものは、何よりも虚心坦懐でなければならぬ、それは道は天下の道であつて、一人の獨占すべきものでないからである。世の中に日本人だけの道、西洋人だけの道などいふものは斷じてあらう筈はないのである。若しありとすれば、それは道と名づくべからざるものか、若しくは、道は道であつても、私道も私道、二人と並んで歩けないやうな細小路でしかあり得ない。日本建國の道は、斷々乎として、そんなけちな道ではない。とやかくの論議はぬきにして、明治天皇の勅教には、明かに『斯ノ道ハ……之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ』と仰せあそばされてゐる以上、日本國體道を拳々服膺して、その徳を一にすべきは、別しては日本國民自體であるが、總じては世界人類であらねばならない道理である。然るに、これを狭く解して獨善的過誤に陥ることは、知らず識らず聖訓違背の大罪を冒すものとして、深く注意せられねばならない。茲に、獨善的思想、施設を警める若干の挿話をあげる。最初は北支における一實話、皇軍の一部

隊が某所に入城した時しも、皇道宣撫の善巧方便にもと、支那民衆に最も喜ばるべき鹽をくれてやるぞ、との有難くも嚴かな布告を發して、それに支那民衆は不潔でいから、石鹼を一つ分けてやらう、それから文化的な菓子キヤラメルも添へてと、その効果のほどを期待して當日となるや案に違はず、城頭は市をなして續來するの盛況、老も若も男も女も、皆嬉々として袋を戴き、叩頭百拜して去つて行く。かくては宣撫の効果百パーセントなりと、その當事者が皆々悦に入つたばかりか、内地にも大々的に報ぜられたのであつたが、その後ふとしたことから、その内狀が暴露せられて見ると全く開いた口もふさがらぬ有様、城頭市をなしたのは、日本軍が呉れてやるといふのを貰ひに行かなかつたら、定めし通匪の輩として一命にも及ぶ大事となるであらうと、四方から群集して來たものであつて、その村間に歸るや、今度は、日本軍が呉れる眞白い鹽には毒が入つてゐる、嘗めると死ぬぞといふ流言蜚語、反間苦肉の策を信じて、鹽には水をかけて流し、シヤボンやキヤラメルは、その用の方を知らず又なじまず、皆深く穴を堀つて埋めてあつたといふことである。かくては、せつかくの皇道宣撫も鹽と共に溶けさり、民衆宣撫もシヤボン玉と吹き飛んで、否うづめこまれて、その後には、彼よりすれば日本人は油斷がならない、今後もどんな手段でくるか知れないとなり、我よりすれば支那人はひねくれてゐて全く度し難いとなつて、いはゞ双方に逆効果を残すのみであつたといふ。次に中支に於ける實例。日本は蔣匪を驅逐してその後の警備に任じてゐるが、敵のゲリラ戰術はな



かく執拗で、飯の上の蠅ではないが、追へば去り、引けば来るといふ次第で、警備の心勞はその盡くるところを知らない。しかも、その勞苦に毅然として耐えて行くところは、流石に日本人、國體の精華たる克忠克孝の奉行者と感心させられるが、靜かに觀察する時、そんな場合でも本人の全く氣附かない逆効果をもたらしてゐる時があるといふ。繁雜な具體的記述を避けて、その要點だけをあげるならば、わが好意が好意として通ぜず、不眠不休で當つてゐる折角の勞苦もつまらぬことから、するすると崩れてしまふことが少くなく、皇道宣布の金札も、それが彼の地、彼の民衆の心理にびつたりするやう、その急所を逃さず、分別して施すのでなければ、全くの猫に小判で、昔の藩札ほどの通用率もおぼつかなく、ともすれば却つて其の反感を買ふ種とさへなるといふ。それだからといつて、なにも皇道そのものの悪からう筈はなく、それらの結果的錯誤を皇道に歸することは、全くお門ちがひであるが、そこに別に審思三省すべきあるものが存するのである。

##### 五、須らく民心を攝取せよ

支那を侵略して、その領土を割取するの愚は、今さら侵略の前科者たる英佛米ソなどに云はれる迄もなく、日本の敢てなさざるところである。日本には支那の一物一糸たりとも、これを無法に掠め去らんとする意思は寸毫も存在しない、ばかりか、むしろ當方から無上の寶珠たる皇道を施してやらう

といふのである。それにも拘らず、その日本の好意を正直に受取らぬとは、まことに不都合千萬である、と短氣に怒つてしまへば、萬事はそれでおしまひである。佛教では、そこで誠めて、瞞るものは地獄に墮ちるとしてある。だから、若しそこで怒つたら、當方も支那を相手に地獄の道中をしなければならぬこととなる。如何にも、こちらの誠意が、思ふ通りに向ふに通ぜぬといふ其の時には、腹も立ちさうなことではあるが、そこが我慢のしどころ、堪忍の袋の縫ひどころである。そこで、他人の好意を正直に受取れぬとは、むしろ不慈なもの、いぢらしいものであると、ひねくれた心の癖を哀れんで、いつそ慈悲の心を垂れて、さらに行届いたなさけをかけてやり、面倒をみてやること、なほ頭是なき子供に對するが如き心得が、何より必要なことである。

俺たち日本は、歐米の勢力を先づ東亞から驅逐して、お前たちをその支配から脱せしめて、自由にしてやるのだと大聲疾呼して見ても、向ふは長の永年、あの手、この手で、こりこりしてゐるのであるから、そして日本ほど素直に外來のものを正直に受け容れうる民族は、世界中どこにも見出しえないのだから、換言すれば、皇道、皇道といつても、そのまゝピンと來るのは日本人お互ひ同志のほかには無いのであるから、そして向ふの人達、一般の民衆にとつては、千人が千人その名を聞くさへ始めてのことなのだから、直ぐには、その利益のほども理解されやう筈はないのである。日本人同志の間にすら、人を見たら泥棒と思へといふ俚諺があつた。ましてや、顔色の黄色ぼさは同じやうだが、



風ていの少からず變つた人間が突然やつて来て、さアこれをやる、飲めよ食へよと云はれたところで、大體たゞ呉れるやうなものに碌なものはあるまいとも考へられさうな所へもつて来て、蔣一黨からは耳に胼胝のいるほど、彼奴らは俺等の敵も敵、不倶戴天の親の仇も同様のものだど教へこまれてゐるのであるから、一往も二往も疑つてみる方が自然といふものであらう。江戸子、否、日本人は一般に概して氣が短いからといつて、それは必ずしも褒めた話ではない。まして今日は、島國日本の氣分を脱して、大陸に聖戰の大旗を押し進めてゐるからには、その邊はよろしく、大陸の氣分を取り入れて、支那人と共に晝寝するぐらゐの雅量を養ふ必要もあらうではないか。うるさい事は子供でも嫌ふもの、一寸の虫にも五分の魂、あまり世話を焼きすぎると、うるさい小父さんだといふことになつて、何時か識らぬ間に一番大事な民心を失ふことになる。

骨を折つて民心を失ふよりは、晝寝でもしながら民心をつかんで行く方が利口といふものである。そんな馬鹿な話があるものか、とむきになるやうでは未だし、こんな實例があると、詳しく中支方面の情況を視察して歸つた人から直接に聞いた話——上海方面では、テロに匪賊、その不斷の横行に惱まされてゐる所が多いが、こゝに一ヶ所、斷然、他の方面とは違つて其の治安が殆んど理想的に保たれてゐる一角があつた。あまり際立つてゐるので、その理由を其處の警備隊長さんに聞いて見ると、その隊長さんの語るには、私の主義は少し他の方々と違つて、支那の事は出来るだけ支那の人に行らせる

のが一番いゝといふ主義で、自分たちは側から乃至遠くからたゞ監督し、見守つてゐるだけで、いはば子供のお守りをしてゐるやうなもの、直接の仕事は何處までも支那人自身の手で運ばせるやうに仕向けてやつてゐるが、まアそれが思ひの外に當つたわけですと、そこが治安上、上海附近での理想郷になつた種明かしをやつてくれたといふ。そして、警備上、まづ何よりも必要な四通八達の自動車道も、管下各村の人たちが争つて造つたものであり、捕へた匪賊の取調べも支那人通譯にやらせてゐるかと思へば、また日本の歩哨さんと親しく話してゐる美しい姑娘は何者ぞと聞いて見ると、それも實は民衆の其の管下へ出入りするのを取締らせてゐる女巡査であつたのには、なるほど徹底したものだ、ちよつと目を睨らせられたと、その視察者は微笑を含みながら語つたのであつた。

日本軍が監督して行らしてゐるのだから、たとへそれを直接やるものが、支那人であらうが姑娘であらうが、結局同じことではないか、といふ理窟も立たないことは無いわけであるが、そこが微妙な人間の感情の問題、それを無視し乃至看過しては、いはゆる蟻の一穴から千丈の堤も崩るゝ世の譬、東亞新秩序の建設も、かういふ痒いところに手の届くやうな、周到な呼吸で進めて行かなければ、遂に九俣の功を一簣に缺くといふか、ほんとに馬鹿なことにならないものでもないのである。人は理に覺つて情に動く、若し一度感情が疎隔してしまへば、それはさうだけれども、となつて、お互ひの間でさへなかくに難しくなり勝つたものである。ましてそれが、如何に同文同種とはいへ、風俗



も人情も、歴史も傳統も、その他も大袈裟にいへば、雪と墨ほども違ふ間柄である。それを一朝一夕にして、萬事細かいところまで領解んで、何でも自分らの手でやつて過なきを得るといふことは、人間業では到底あり得ないことである。

だからといつて、その急所を押へることを忘れたら、瓢箪鯨ではないが、するりと逃げられてしまふに定つてゐる。急所さへ押へれば、難物の鰻でさへおとなしく粗の上に載つて、存分に料理される。萬事は圖星、かん所が大事である。支那事變の大きな圖星、かんどころとは、支那民衆の心をつかむこととでなければならぬ。少しく難しくいへば、支那の民心を我が心に攝取することである。

## 六、色香美味の豫防注射

民心を攝するとなると、問題は一往、物の上から離れて、全く心の上の問題となる。心は無形のものである。その無形の心の動きが、まづ双の眼に顯はれ、顔の色に出て、ついで身の所作ともなつて、始めて誰にも具體的に認識されることになるのであるが、支那民衆は我等日本人と比較すると、いつさう此の心の動きが如實に、顔色、所作の上に表れないやうである。如實に表れないばかりか、前にも少しく記したやうに、その心にも無いことを、さも眞實あるやうに見せかけることの巧みな民族で、といふよりは不幸にも長い傳統、習慣によつて、馴致されて來た民衆なのである。

支那の古人は、山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難しと、歎じてゐるが、この語も古今に通じ中外に恃らぬ眞理性を持つてゐる。げに、我が心中の賊を破る事は、實に難きものではあるが、その難きを敢てなすにあらざれば、到底完全に山中の賊、即ち敵人の心をつかみ取ることは不可能の業に屬する。これに反し、若し一度我が心中の賊を平げ得たとしたならば、その心を世に施して眞に無礙自在なるを得るであらう。諸葛亮孔明が、蜀即ち今の四川省の地に、劉備玄德の知己に感じて、漢室の衰滅を既倒に還へさんものと、苦心經營した折しも、北の方師を出して魏を討つべく、先づ南の方、後顧の憂を斷たんと、南蠻の首魁を七擒七縱した話は、餘りにも有名であるが、やゝもすれば、その孔明の智謀の鮮かさに眩惑されて、その忍、その仁の至高大なるを見落しがちである。仁者に敵なし、無敵の二字は、かくの如き場合に使つてこそ眞實の意義があり、昨今の用例は些か亂用の嫌ひがある。それはともなく、七度捕へ七度縱した孔明の心中には、南方山中の賊は既にすでに無かつたのである、遺憾なく平定し盡されてゐたのである。然しながら、それを更らに形の上に見るまでには、七擒七縱といふなみ／＼ならぬ手数をかけなければならなかつた。この邊が、いはゆる一諾千金を重しとする日本武士道乃至日本民族の道義性と支那諸民族のそれとの大きな相違點の一つで、我等の大體經營上、深く銘記さるべきことであらうと思ふ。事はあまりにも面倒な話ではあるが、その面倒がものをいって人文を織り成すのである。世の中は、まことに此の面倒で持つてゐるといふも過



言ではなく、第一この六尺に足らぬ一個の身體を、僅かに五十年か七十年持ちつゞける爲めに、どれほどの面倒を盡さねばならないことであらうか、考へて見たゞけでもぞつとしさうなことである。世の中が進めば進むほど移れば移るほどこの面倒と複雑さは増してゆくばかり。日本も支那事變が起らなかつたなら、現今これほど面倒なことにはなつてゐなかつたであらう。人間、面倒を厭つたら、一日と雖も此の世の中に生きて行くことさへ至難の業である。

それを、この度の支那事變は、滿洲の世話、面倒を見るだけでも、容易ならぬところへ持つて来て、それよりも二倍、三倍、幾層倍、その難易、輕重、比較にもならぬ程の大仕事、複雑面倒極りなきものであるから、そこで總動員も總努力も必要なものとなつてくる。若し、それを、さうく面倒は見きれないといつて、この邊で手を引きでもしたなら、いつたい如何なるか。九仞の功を一簣に缺く、そんな生やさしい事では終りさうもない。滿洲は日本の生命線であると呼ばれたが、支那事變は、一つ間違つたら、日本の生命取り線となりかねない。

さて、善い事をするのに、何の面倒もなかりさうなものであるが、實は善い事を爲すには、それが善い事であればあるほど、大切に面倒を見ていかなければ成就し難いものなのである。例へば野生の草は放つて置いてもずん／＼伸び放題に伸びて行くが、いゝ作物ほど手入れをしなければ、育ち難いのと同じ理合である。一ばい飲まうではないか、などいふ相談なら一も二もなく纏つてしまふが、

おい、これからお互ひに禁酒禁煙して、時局特別の貯金をしやうではないかなどいふ相談は、さうちよつと纏りかねるやうなもので、それは飲む、飲まない、唄ふ唄はない、といふ二つの、いともはつきりした命題ながら、そこには二二天作の五式に、簡単に割り切れない、あるものが存在するからである。換言すれば、世の中の善悪といふ、その事柄のそのもの、理論的判斷は、頗る簡明であつても、いざそれを實際の上に運用するとなると、いろ／＼の呼吸、鹽梅が必要となつてくるからである。例へば病に施す薬も同様、材料は同じものであつても、その與へやうによつて、薬ともなれば毒とも變ずる。

世界無比、唯一の皇道、それを支那四百餘洲に光被せしめて、四億の民衆を塗炭の苦しみに救ふのだ、正義の軍だ、聖戰だ、新東亞の建設だと、せつかく意氣込んで、さて實際に支那民衆に當つて見ると、箚食盡漿、三拜九拜の歡迎ぶりも、表と裏とは大違ひ、腹の底では何と思つてゐるか、分つたものではない、となれば折角の意氣込みも挫けさうなことで、或はそこで絶望落膽し、或は自暴自棄して、一死奉公、聖戰貫徹の初一念もどこへやら、徒らに瀆武を大陸に留めてしまふやうなことになる。それは、それこそ大變である、前に記した生命取り線のとんだ御手傳ひをすることゝなる。それをせぬ、その用心、心の病の豫防には何が一番いゝか、此處に題して『色香味の豫防注射』といふ。『色香味美』とは、法華經壽量品の金句である。そして、



此の經は則ち閻浮提（全世界）の人の病の良藥なり、若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。

と、其の妙じき効能の程が記されてゐる。かく、人間の心の病なり、何でも癒らぬものはないといふ、世界第一絶待の大効能を有する法華經、その法華經の大良藥を、貪・瞋・癡の三毒に惱む一切の人々に飲まして、完全に救ひ攝つてやらうといふ、本佛釋尊の大慈悲心、その佛は我等の心の親であるが、その親の心子知らずで、親の留守中に、他の毒藥を飲んでしまつたから大變である、その毒が遽かに發して悶亂し、大地をのたうち廻つてゐるところに、運よく親が歸つて來た、そこで、やれ嬉しやと早速親の袖に縋つて、救ひを求めさうなものであるが、そこが毒に中てられてゐる何よりの證據で、たゞごろ／＼と轉つて泣き叫んでゐるばかり、親はます／＼驚いて、急いで秘藏の良藥を取り出して、擣篩和合とあるから、擣き篩ひ和合して、しかも色香美味とあるから、色も香りも味ひも、何一つとして申分のない良藥を、さて其の氣狂のやうになつてゐる子供に、一刻も早くのましてやらうとせられたのだが、一向に齒を嚙ひしばつて飲まうといふ氣を起さない。

良藥は口に苦しいといふ、苦い藥も我慢して飲むほどならば、分別はたしかなもの、佛様ならずとも餘計な苦勞は入らないわけであるが、今一般支那の民衆は、丁度その分別を失つてゐる狂子である。他の毒藥を飲んで經文さながらの四苦八苦、狂亂の極みを盡してゐるのである。そこで同じく皇道、

日本精神の精髓を彼に施してやるにしても、生一本のまゝ、口に苦き生藥のまゝで服ませやうとしても、やはり齒を嚙ひしばつて、かぶりを振るばかりであらう。ここに於いてか、あれこれと至らぬ我等の脳味噌を絞るまでもなく、佛様の智慧をそのまゝ拜借して擣篩和合、支那民族の心に無限の同情を注ぎ、その心を我が心に攝り容れて、彼等のいはゆる面子も立つて満足するやうに、色も香りも、味ひも美しいものとなして、つまり先づ翻譯の手心を加へ、糖衣を覆せて服ましてやるだけの面倒は盡すべきものと考へるのである。然し、それでも敢へて飲まうとはしないかも知れない。他の毒藥を飲んで、心が顛倒してゐるのであるから、色香味ひともに何とも云へぬ是の好き良藥に於いても、なほ好からずと思つて、一筋縄ではとても飲まうとはしないかも知れない。然らばその時には如何にすべきであらうか。

佛様は、そこで巧妙な方便を用ゐられた。即ち、再び他行せられて、そこから使の者を遣はして、哀れな子等の爲めに告げしめられた。お前たちの父親は、お前たちの病氣を心配されながら死んでしまはれた。然し、こゝに好い良藥を残し留めて置かれたから、さア、これを服みなさい、きつと直ぐに樂になるぞと。さて子等は懐しの父親に再び會ふことが出来なかつたと思へば、ひとしほ戀慕の情の切なるものがあつて、それではせめて父の留め置かれた藥だけでも飲んで、生前の御慈愛を偲ばうと、早速それを取つて服んで見ると、病は忘れたやうに直様ケロリと癒つてしまつたばかりでなく、



父親も子等が、使に持たしてやつた薬を飲んで正氣に復つた山を聞いて、それならばと今度は嬉しき父歸るの劇的再見となつたといふ譬が記されてゐるのである。むづかる子供は、時に裸で放り出して、暫くじつと様子を看てゐるのも必要な教訓法である。支那に對して皇道を布くに當つては、深くこの經文の意を得て、その宜しきを制することが最肝要なことであると思ふ。然し如何に方便が必要であるからといつて、方便は何處までも方便であつて、遂に目標ではあり得ない。故に何時、如何なる時でも方便に執はれて窮極の目的を見失つてはならないこと勿論である。

### 七、神州東亞と我等の使命

日本は神國である。何故に神國であるか。國を肇められた方が神様で、代々その國を治し給ふ方が即ち日本天皇は、その神様の御裔であり、又その國を治したまふ道も、また神々の無窮に遺したまへる道だからである。故に、その國民は即ち神國の民、換言すれば現人神と仰ぎ奉る。天皇の使徒でなければならぬ筈である。神の道は即ち君の道であり、同時に民の踏むべき道である。それを特稱して皇道といへばとて、天皇及び皇族の方々のみ踏み行ふべき道といふ意味ではなく、別しては日本國民、總じては全世界の人々も俱に踏むべき大道なることは、前にも記すが如く明かなことである。

る。そこで、その皇道を四海に布く御手傳ひするのが我等の務め、即ち天業翼賛であるが、事實問題として、之を支那に布いた場合には如何なることになるであらうか、またなるべきであらうか。神國日本の精華を發揚して、これを東亞に布く、そこに由て来るものは當然、神州東亞でなければならぬのである。「神國日本」から「神州東亞」へ、即ち日本の發展であり止揚であり、日本天皇の東亞光臨である。日滿兩國の精神一體、そこに既に神州東亞の萌芽を見るのであるが、未だその意義が充足され、自覺せられてゐない。やゝもすれば、日本天皇と滿洲國皇帝とを相對的に見る思想の殘滓に障へられて、日本天皇東亞光臨の發祥が歡喜せられてゐない。日本と滿洲國、この二國はともに立派な獨立國であり、なにかんづく日本は、その滿洲を立派な獨立國に爲すべく、大いに骨を折つて來たわけであるから、一往そこに相對的位置の存することは勿論であるが、日本天皇には、日本一國に君臨なさる以外に、普ねく世界に光臨なさるべき御使命がおはします。そして、この事はとく既に、神武天皇建國の御洪謨に明かなことである。即ち、日本天皇の御使命の様相には相對面と絶對面とが存するのである。相對面とは、いふまでもなく、日本一國の元首としての御資格から由て來るものであり、その絶對面は、即ち日本國體の道義的威力の事實發現である。日滿兩國の精神一體、一徳一心に就いていへば、同じく一體、一心とは云へ、その本末を論ずれば、日本が本で滿洲が末であること論議の餘地を見ない。即ち光の本、精神の本、徳の根源は日本にあり、その樞柄は常に日本天皇の



綜攬し給ふところであらねばならないのである。

この事を更らに角度を變へていふならば、日本天皇の御光りを日本一國から東亞に解放することである。換言すれば日本人だけが、天皇を獨占してはいけない、さういふ狭い量見から脱皮しなければならぬといふことである。また、こゝに卑近な例をあげれば、日本はその持つてゐるもの一切を投げ出し、支那も亦その持つてゐるもの一切を投げ出して、そこに第三のもの、即ち新東亞といふ合資會社、一新組織體を造りあげることである。その名は東亞聯邦と呼ばれる、もいゝであらう。此處に神洲東亞と呼ぶは、その指導原理、究竟の目標を何處に求むべきかに就いての特稱である。即ち神洲東亞とは政治的名稱ではなくして道義的名稱である。

神洲東亞の民は、日本を始め、滿洲、支那、蒙古を含む、その東亞に住むべきあらゆる民族を包容する。皆ひとしく神洲東亞の民であることに於いては、何等の差別もあるべきではない。然しながら、日本天皇が其處に特別の使命をお持ちになると同様、日本國民もそこに自ら特別の使命を持つ。即ち、天皇の使徒として、その御稜威、御慈愛を東亞の全民に徹底せしめる使命、義務を先天的に有してゐるのである。即ち、東亞の疾苦を救ふ唯一の是好良藥、日本國體道を東亞幾億の民に服せしめるべき使者の役目を持つてゐる。この自覚の上に立つてこそ始めて東亞新秩序の建設は入眼され、玉成せられるであらう。

#### 八、支那民族に神性ありや

而して、如何にわれ／＼日本人が、東亞の神國化を希求したとしても、その人的要素の過半を占める支那民族に神性なしとするならば、換言すれば、皇道は日本人の獨占物、特殊性であつて、ファシズムの如く、またナチズムの如く他國、他民族に輸出さるべきものでないとしたならば、即ちそれに普遍妥當性が缺けてゐるとするならば、その努力は結局徒勞に終らざるを得ないであらう。

皇道を日本の專賣特許とする思想からいへば、もとより其の努力も入らないわけであるが、それが嚴として古今に通じて謬らざるものであり、中外に施して悖らざるものである限り、進んでは之を四海に布かなければならぬのである。その手始めとしての東亞光臨である。また若しも、それが全然支那民族に了解せられぬものであるならば、否、了解せしめることが出来ないならば、それはとりもなほさず、明治勅教の御文を反故にし奉ることとなる。これ誠に畏るべきことである。

そこで、是非とも支那民族にも『この道』を領解せしめ、その恩澤に浴せしめるやうにしなければならぬこととなる。その場合に支那民族の神性如何が問題となる。果して神性ありや無しや、机上の論議は暫く措いて、これを日本歴史上に探るならば、その神性の存在に就いては些かの心配も入らないこと明瞭である。日本の文化史は、大陸文化の渡來によつて綴り初められてゐる。その文化の渡來



は、また彼の民族の渡来でもあつた。果して幾許の支那民族が、我が國に移住したであらうか、全く詳かではないが、決して少い數ではなく、分村的にさへ移住した記録も残されてゐる。而して今日、それら如何なる地方に行つても、そこに支那民族の特殊村落を見出すことは絶対に不可能である。それほどよく同化し同化し盡されてゐる。神州東亞の建設が、それと同様のことを目標としてゐるものでないこと勿論であるが、そこに明かに支那民族の神性の存在を證するものがある。如何に互を磨いても玉とはならず、砂を炒つて油となすことが出来ず、無より有を生ずることが出来ぬものである限り、日本に如何に強烈なる同化力があらうとも、歸化した支那民族に、日本人と同様の神性の内在することがなかつたならば、到底、今日に見るが如き渾然たる融合一致は見出し得なかつた筈である。

然しながら、事のそこに至るまでには、相當の年月を要し、他方にまた巧みなる同化策の取られたであらうことも想像せられるのである。色香美味の同化には、それに相當する擽節和合の操作を必要としたのである。例へば日本各地の神社、その祭神の複雑性は、最もよくその間の消息を物語るものであらうと思ふ。天津神と國津神との合祀、さらに蕃神との複合、日本の神社史は即ちさながら日本民族の結成史であり、異種民族の同化融合史である。

神州東亞の建設とはいへ、たゞ無暗に日本の神々を強制的に拜ましめやうとするものであつてはならない。巧みに彼等の信仰を淨化し攝取して、徐々に神性の發揚をはかるべきである。例へば、この度の聖戰激闘の地に、それ〴〵靈祀を建立する場合の如き、自他の犠牲者を等しく合せ祀るは勿論、その形式に於いても、出来得る限り、彼等も其の前に拜跪し易いやうに、必ずしも内地のそれに倣ふことなく、特別の工夫が施さるべきである。痒いところに手の届くやうな、周到ないたはり、温い心が、常に日本人の心に充ち満ちてゐてこそ、日支協同の實もあがり、治安の確保も期せずして得られるであらう。

### 九、建國の八大主義に省みる

日本の國は、古來、神ながら言あげせぬ國とせられ、萬あげつらはぬをよしとせられてゐるが、それは未だ四方の波垣を國の守りに、大陸から名譽ある孤立を保ち得て、専ら大陸の文化を吸収し、その醇化融合に努力してゐさへすればよかつた時代のことであつて、神國日本から神州東亞へ、さては神州東亞から世界の神國化へまで進むべき時、即ち八紘一字、六合一都の正時節に臨んでは、それこそ日本國體宣傳省の開設をも見なければ嘘である。

わが國體の世界的規模は、遠く神武天皇建國の昔から定つてゐる。たゞそれが二千五百年の長きに互つて特に唱導せられなかつた迄である。それを明治の聖世に會して卒先唱導せられた人、それが



田中智學先生である。先生は即ち 神武天皇の聖蹟に基いて、積慶・重暉・養正を國體の三大綱、神・君・道・國・民を國體の五大要素と定められ、さらに建國の事蹟に基いて、建國の八大主義なるものを決せられた。即ち、

神人一如 祭政一致  
報本反始 克己内省  
中心統一 開發進取  
積聚膨張 絶對平和

である。人間同志が、おの／＼の欲望にまかせて、五分と五分とで争ふことになれば、その論は干ない。理論で決着しなければ、次では感情の絡れを伴つて腕づくともなる。いはゆる兩雄並び立たずで、どちらか一方倒れるか、乃至は鰐蚌の争ひ漁夫の利となつて、空しく第三者に熟柿を拾はれてしまふこととなる。その第三者が、また他の第三者と争ふ。一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生ずで、この争ひが方々に起つて、人類はその繁に堪えず、自然にそれを裁くべき標準に思ひ至つた。それが即ち神性である。

その神性、その神、人間以上の標準が立ち、そこに普遍妥當の眞理性が見出されて始めて治國の要道が確立する。

日支間の問題にしても、この大所高所、神人一如、祭政一致の玄底から、その一致點を見出し來るのでなければ、一時の暫定的解決はなし得ても、恒久的解決は遂に望み得ないであらう。

神人一如と祭政一致とを理上の工夫とすれば、報本反始と克己内省とは事上の練磨である。擣節和合、今留在此の演練である。かくて我等が心を澄明にし、謙虚ならしめて、まさしく中心統一し、開發進取するのである、澄明なるが故に理として徹せざるなく照さざるなく、謙虚なるが故に事として解せざるなく容れざるなしである。

中心すでに定まつて搖ぎなく、開發進取して息まざれば、積聚膨張は自然の勢である。天地と共に窮りなき日本の寶祚、その統一下に東西兩洋の文化は次第に積聚され、國力はおのづから膨張して、遂に今日眼前に見るが如き東亞の盟主日本の力が充實せられるのである。絶對平和は未だ日滿兩國の間を出でないが、やがては支那大陸に及び、國體正義の力の積聚膨張して到り極まるところは、即ち世界の絶對平和であらねばならないのである。

以上、八大主義の一擧に省みても、我が國體の道は斷じて獨善主義的ならざることが明かに了解せられるであらう。我れに孔明の智謀なくとも、我れに國體正義の靈光の宿る限り、支那民衆の心を攝ることなど難からんやである。



### 十、支那の大意に報酬すべき秋

支那は大國である。日本は小國である。小國であるばかりでなく、過去に於ては、さんく支那の世話になつたのである。それが一度、日清役に無外の大捷を博するや、眠れる師子を忽ち眠れる豚と化せしめて、餘勢は遂にチャンコロなど、些かならずこれを輕侮する氣風を生ずるに至つた。支那今日の排日、侮日、抗日の反噬は、まさしく、その遠因を此處に發するとも省せらるべきであらう。如何にも近代支那は、だらしのないものであつたが、一片同情の眼をもつて見るならば、やはり之も支那の一时的な國病と稱すべきもので、支那五千年の文化は、燦として世界萬國史上に輝いてゐるのである。その上、支那は自國に發生した文化の總てを乃至印度その他の周邊に發生せる總ての文明をも、これを普ねく吸收して、直接間接に我が日本に傳へて呉れたのである。また、同時に多數の移民をも送つて、直接に文化の開發、民族の玉成に資するところが多大であつた。我等が日常に使用してゐる文字、漢文は勿論のこと、假名といへども其の本を質せば漢字から來たものであり、その漢字、漢語によつて儒教がもたらされ、佛教が取次がれた。さては、寒さを凌ぐべき着物の織り方、飢を凌ぐべき食料の作り方、住むべき家の建て方、等々衣食住の總てに互る平和産業の其の部面に於て、一として其の啓發の恩恵に浴せざるものは無かつたといふも全く過言ではな

い。かくも日本の支那に負ふところの餘りに多くして、それに酬ゆることの餘りに少かつたことを思はねばならないのである。

日本は果して今日まで、支那に如何なるものを與へたであらうか。明治以前に於いては殆んど絶無ともいはるべく、明治の中葉以後、數多の留學生を迎へて、我が文化を傳へ、また我が國人も彼の國に渡つて直接その指導に當る等、些か長年の恩養に報ゆるところがあつたやうであるが、その報酬たるや、日本が歐米から必死に學んだものを、そのまゝ再輸出した邊が多く、それは日本が過去二千年の間、せつかく支那から傳へて玉成した東洋文化の精華の藏出しではなくして、いはゞ到來物でお義理を濟ましたといふやうな形のものであり、支那自身も亦、未だ深く日本の眞生命に觸ること少く、歐米に出かけるよりも、その出店のやうな手近な日本で、安價にそれを仕入れることが出来るといつたやうな考へ、それが又、侮日の一因ともなつてゐるのであるが、その爲めに日本の眞價を認識するよりも、日本が骨折つて歐米に頭を下げさせる仲介をしたやうな思はぬ結果ともなつてゐる。

かくては、日本が眞に支那の大意に酬ゆる所以とはなり得ないのである。然るに、はしなくも、滿洲事變に引續いて支那事變となり、我が國は否でも支那の根本的世話を焼き、面倒を見なければならぬ劍ヶ峰にさしかゝつてしまつた。一步を過れば千仞の谷底に落ちこまねばならないが、無事に此處を渡り切れれば、間もなく行手の山頂に神州東亞の日の出を拜することが出来るであらう。



滿洲事變以來、數へ立てられたる支那の惡徳は量限りも無いほどであるが、怨に酬ゆるに恩を以て  
 するこそ、最高の道徳觀であり、また我が民族をして一層輝きあらしむる所以でもある。まして過去  
 には大恩を受けてゐるのだ。われ／＼國民は、ゆめ／＼戦捷に驕ることなく、ます／＼心を引締め、  
 降魔の利劍を研ぎ澄ましつゝ、今こそ支那民族多年の大恩に、温き心、無限の大同情心を注いで、  
 その心を攝取し、ともに／＼手を取り合つて、心の奥底から防共の聖陣に立つ日の、一日も早からん  
 ことを祈るべきであらうと思ふ。

昭和十四年七月十六日印刷  
 昭和十四年七月三十日發行

第二號パンフレット  
 神國日本から神州東亞へ  
 定價金拾五錢(送料三錢)

著者兼  
 發行人

安 中 昌 信  
 東京市江戸川區一之江

印刷人

横 山 定 一  
 東京市江戸川區一之江

發行所

明 治 會 本 部

電話 江戸川十九番  
 振替 東京三六九九八番

### 國運興隆平和建設の捷徑

#### 明治會々員を募る

國體を明徴にし、國運の興隆を期し、世界の  
 平和を圖るには國民舉つて 明治天皇の御聖教  
 に目覺め、その御遺業に聚ることが、尤も正し  
 く、且周到明快で一番の近道です。

大正天皇も、國民舉つて 明治天皇の御遺訓  
 を仰げと切なる御聖訓を垂れさせられ 今上天  
 皇も同じ御趣旨を嚴諭あらせられ、又「明治節」  
 を御制定あらせられました。國體明徴、國運興  
 隆、世界平和建設の大道はかくも明確に決定し  
 てゐます。

然してこの大精神を普及實施するのが「明治

會」の目的であり事業であります。今や國家未  
 曾有の重大時局に際し本會は志の同じき人と  
 共に國運恢弘の事業を成就したいと存じます。  
 どなたでも、明治大帝を尊信し、その御教へ  
 を仰いで、舉國一致の下に、正しい強い力を造  
 り出して、世に平和と光明を新らしく導き出さ  
 らうといふことに御同意の方は奮つて明治會に御  
 加入願ひます。

#### 明治會略案内

- 一、明治會は、創立されてより茲に十五年にな  
 ります。
- 一、明治節制定請願運動を始め昭和四年の全國  
 教化總動員運動、其他數々の大事業をなし又



# 國體主義要義

田中先生 智學 著

日本國體の研究	價 三・〇〇 送 一・二四	國體の明治天皇	價 五・〇〇 送 〇・六〇	尊王正議	價 一・〇〇 送 〇・九〇	國體總論	價 四・〇〇 送 〇・六〇	日本の建國	價 三・三〇 送 〇・三〇	日本とはいかなる國ぞ	價 八・〇〇 送 二・一〇	明治大帝論	價 三・三〇 送 〇・三〇	國體の話	價 三・三〇 送 〇・三〇
<p>最新最古世界的文化たる日本國體學の最高權威たる著者先生が其深遠なる蘊蓄を傾けて組織的徹底的に日本國體を講明せられたるもの。本書は明治天皇の偉大なる聖徳が神武天皇の再現日本國體の事現なることを論明し、現代國民に國體の自覺を促されたる講演録なり。日本國民は皇室の尊崇に於て嚴明純正の把持なかるべからず、本書は日本國體の正義を基準として、在來の浮淺なる尊王論を匡謬す。本書は先生の著「日本國體の研究」の篇首の一篇を別刊して、先づ日本國體の概念を國民全般に與ふべく普及を期せられたるものなり。日本に生れて日本を眞に教へざるは現代教育の一大缺陷なり、本書は深刻なる國體觀より日本建國の實義を闡明せる民心作興の寶典也。此書は國民の新讀本たるべく極めて通俗平明に日本國體の要を知り國民の眞使命を了解せしめんが爲述作せられし國民必讀の良書なり。明治大帝の誕應は國體の應時發揚にして、その勅教大訓はすべてこれ國體皇道の結晶である事を徹底して主張せられたる寶書なり。通俗平明に我國體の眞義を説明せられたるもので日本全國は勿論廣く海外にまで賞讃せられ數十萬部を發賣し感化偉大なる良書なり。</p>															
<p>取次所 東京一之江區 明治會本部 (振替東京三八九九六)</p>															

滿洲事變現地將兵慰問、今事變には國柱會と共に皇太子殿下御武運祝禱御守を謹寫せる御守拾數萬體を陸海軍省へ献納し尙隨時に書籍等を献納しつゝあります。

一、明治天皇の御聖訓を普及し、國體を顯揚する爲「講演會」「講習會」「映畫」「藝術教化」等を行なひ、又時々必要の書籍を發行して頒布します。

一、會員の種別は「研鑽員」「正會員」「特別會員」の三種を主體とし、會費はそれ々々年額一圓貳拾錢、參圓六拾錢、拾貳圓です。

一、會員には修養機關誌として、國體顯揚聖訓普及雜誌「大日本」を會員種別に應じて月一回又は月三回各々配布します。

一、東京は勿論全國會員は毎月第一日曜午前九時一齊に明治神宮に參拜し、又は明治神宮を遙拜いたします。

一、明治會の支部は日本内地及び滿洲朝鮮臺灣上海天津青島、米國等に互り百有餘あります。

一、本會對する賛成贊助の一流名士大家は實に百數十名に達してゐます。

尙詳細なる明治會案内あり、申込次第送附致します。

東京市江戸川區一之江  
**明治會本部**  
 電話江戸川一九番  
 振替東京三八九九六番



斷然群を抜ける國體の大寶典、骨を碎き血を以て書けるこれぞ愛國至誠の結晶、内容極めて明快平易興味盡さる苦心の編輯、日本國體に關する最高權威の書たり、日本國體こそ日本及日本人の全生命にして、世界の絶體平和文化建設の根本原理なり、國體を知らんとする人は先づ本書を讀め。

日本國體學創唱者 田中智學先生主講 門下及名士數十氏執筆

# 日本國體新講座

菊判千八百頁乾坤二卷箱入金文字總クロース装  
口繪寫真色刷共三十餘頁他貴重寫真多數入豪華本

定價金八圓 送料内地 參拾錢  
滿鮮臺樺 七五錢

大普及の爲  
十一月三日迄

特別割引

金六圓五拾錢

(内地送料共)  
滿鮮臺樺 四拾錢増

○色刷寫真入美麗内容見本

東京市江戸川區一之江

明治會本部

申込次第送附す。

振替東京三六九九八番

## 本書に就て

本書の著者主講田中智學先生は日本國體學の創唱者にして身命を培して國體の宣揚普及に努めらるること實に五十六年間に及び國體著書も數十に達せり。先年全國一舉に國體思想を確立普及せんと大願を發され俊秀の門下を動員し尙名士大家をも加へ各々部門を分擔してあらゆる角度より國體に關すること細大洩さず興味深く明快平易周到に詳述編輯されたる國體大百科全書とも稱すべきものにして現下必讀の要あるは勿論以て子孫に傳ふべきの書なり。

## 内容の一部

日本國體とはどんなものか  
國體思想はどう變遷して來たか  
日本國民の正しい考から見た農村問題  
國體を表現した歴史物語  
帝國憲法のたれにもわかる講義  
日本婦人の輝く物語  
明治天皇の偉大なる御垂訓及び御事蹟  
其他十六項目

0  
28